

バプテスマのヨハネのつまずき

【聖書箇所】 マタイの福音書 11章 1～15節

ベレーシート

●これまでのマタイの福音書は、大きく分けると以下のように区分できます。

- (1) イエシュアの宣教の開始・・・・・・・・・・4章 17節～25節
- (2) 山上の説教(御国の憲章) ・・・・・・・・・・5～7章
- (3) 奇蹟による御国のデモンストレーション ・・8～9章
- (4) イエシュアの宣教戦略 ・・・・・・・・・・10章

そして今回から、(5) イエシュアに対するつまずき・・・・・・・・・・11～12章に入ります

●11章に入って最初にイエシュアに対してつまずいたのは、なんとバプテスマのヨハネでした。まずヨハネの遣わした弟子に対して、そしてヨハネの話を実際に聞いた人々に対して、イエシュアは、「わたしに**つまずかない者は幸いです。**」と語っています。さらには、数々の力ある奇蹟がなされたにもかかわらず悔い改めようとしなかったコラジン、ベツサイダ、カペナウムの町々の人々、安息日に穂を摘んだことや癒しをしたことで「安息日違反」と訴えられた「安息日論争」、パリサイ人たちによるイエシュア殺害の相談、さらには、イエシュアが悪霊を追い出しているのは悪霊たちのかしらの力だとする「ベルゼブル論争」へと話は展開していきます。そのような中でイエシュアをメシアとして受け入れるのか、拒否するのかという二者択一が迫られます。イエシュアに対して中立の立場は存在しません。イエシュアの宣教の働きは、その時代の人々にますますつまずきを与えるものとなっていきます。したがって今回からのメッセージは、しばらくの間、「イエシュアへのつまずき」というテーマに沿って扱われます。それとは対照的に、イエシュアに従う弟子たちに対する珠玉のメッセージもところどころに語られています(11:25～30、12:49～50)。私自身もそうとは知らずに、11章 28節のみことばによって、今から46年前に教会に導かれたのです。それでは、早速、11章に入っていきたいと思いますが、1節からイエシュアは十二弟子たちとは別れて、単独で伝道の働きをされています。弟子たちと再会するのは12章 1節からです。

【新改訳 2017】 マタイの福音書 11章 1節

イエスは十二弟子に対する指示を終えると、町々で教え、宣べ伝えるために、そこを立ち去られた。

●10章でイエシュアの宣教戦略を十二弟子たちに語られた後、イエシュアは再び、町々で「教え」、「宣べ伝える」ために「そこを立ち去られた」とあります。4章 23節でも、9章 35節でも、「教え」と「宣教」と「癒やし」がセットになっていたにもかかわらず、11章 1節では「癒やし」が欠けています。それは8～9章で「癒やし」のデモンストレーションが十分になされたからです。11章 2節に「さて、牢獄でキリストのみわざについて聞いたヨハネは」とあることから、「癒やし」が前提にあることが分かります。

1. バプテスマのヨハネのつまずき

●さて、イエシュアのガリラヤ宣教はバプテスマのヨハネが捕らえられた時から始まりました(4:12, 17)。ヨハネが誰によって捕らえられたかといえば、ガリラヤとヨルダン川をはさんだ斜め向かい側の**ペレヤ**の領主であったヘロデ・アンテパスによってでした。ヘロデ・アンテパスは自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤを略奪し、結婚したことをヨハネに責められたことで、彼を捕らえたのです。ヘロデはすぐにも彼を殺そうと思いましたが、群衆がヨハネを預言者として認めていたために、群衆を恐れたヘロデは彼を獄中に入れたのです。それ以来1年近くの時が経過し、ヨハネは処刑を待つばかりの身となっていたのです。その間に、イエシュアは宣教を開始し、多くのわざをなしていたのです。そのことが思いがけない波紋をもたらしました。バプテスマのヨハネは獄中でイエシュアの活躍ぶりを聞き、メシアである確信を強めるところか、むしろ迷いが生じたようです。そこで、ヨハネは自分の弟子たち(ルカ 7:18 によれば、遣わされた弟子は二人とあります)を遣わしてイエシュアにこう尋ねました。



マタイ 11 章 3 節 「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」

●時が経つうちに、バプテスマのヨハネが考え、期待していたメシア像とは微妙に食い違っていたようです。「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」という質問をするということは尋常なことではありません。イエシュアこそメシアだと確信して多くの人に紹介してきたからです。このヨハネの質問に対してイエシュアは、イザヤの預言(35:5~6、61:1)を引用して、その預言が文字通り行われていることを強調して、自分がメシアであることを証拠立てています。

【新改訳 2017】マタイの福音書 11 章 4~6 節

- 4 イエスは彼らに答えられた。「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。
- 5 目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。
- 6 だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

●ヨハネはなぜイエシュアがメシアであることに迷いが生じたのでしょうか。イエシュアは、ヨハネからつまり、遣わされた弟子たちに、「あなたがたは行って、自分たちが見たり聞いたりしていることをヨハネに伝えなさい。」と答えるだけでした。そして、「だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」と言って、信じることを求められたのです。

●バプテスマのヨハネもイエシュアも「悔い改めなさい。天の御国は近づいたから。」という同じメッセージを語って宣教の働きを開始しています(マタイ 3:2=4:17)。しかしそのメッセージの解き方は当初から

異なっていました。二人のメッセージの違いは、ヨハネは罪に対する神のさばきを語って悔い改めにふさわしい実を結ぶようにと語ったのに対し、イエシュアは天の御国のすばらしさに焦点を当ててそれをデモンストレーションしました。しかもそのデモンストレーションは、すでに預言者たちが語っていたことなのです。ヨハネの使命はあくまでも天の御国をもたらすメシアの道備えとしての働きでした。

【新改訳 2017】マタイの福音書 3章 11～12節

11 私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力のある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格ありません。その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。

12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。

●これを読むと分かるように、使命の違いはヨハネも気づいていたはずですが、しかし、御国に対する考え方が違っていたようです。バプテスマのヨハネはイエシュアの働きを直接見ることなく、捕らえられてしまいました。そして、ヨハネの言う「11 その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。12 また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃きよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」という働きをイエシュアのうちに感じられなかったのではないかと推測します。自分の身は投獄されていて、いつ処刑されてしまうかわからない状況の中で神に背く者に対する厳しさばきをもたらすはずのメシアとは違っていたことで、イエシュアに対する期待が裏切られたと感じ、それがヨハネのつまずきとなって、「おいでになるはずの方はあなたですか。それとも、別の方を待つべきでしょうか。」と言わせたのではないかと思います。

●そう思うと、イエシュアが「わたしにつまずかない者は幸いです。」ということが本当に難しいことなのだと感じさせられます。「いいえ。私は大丈夫です。決して私はつまずきません」と言えるでしょうか。イエシュアが弟子たちに対してこう言われました。「**あなたがたはみな、今夜わたしにつまずきます**」と。すると、「**たとえ皆があなたにつまずいても、私は決してつまずきません。**」と言った弟子がいました。しかしこの弟子は見事につまずいてしまいました。その弟子とはだれのことでしょうか。そうです。弟子たちの筆頭、「岩」と呼ばれた「シモン・ペテロ」でした。彼はいつでも筆頭に立とうとして発言するタイプですから、この時「私は決してつまずきません」と真っ先に言いましたが、おそらく他の弟子たちもそうであったに違いありません。イエシュアとともに三年半過ごしてきたはずの弟子たちでもイエシュアにつまずくのですから、私たちも自分を買いかぶりすぎではならないのです。ちなみに、イエシュアを三度も否んだペテロが立ち直ることができたのは、ひとえにイエシュアが彼のために祈ったからです(ルカ 22:32)。

●「つまずく」と訳されたギリシア語の「スカンダリゾー」(σκανδαλιζω)は、今日でも「スキャンダル」という言葉で使われています。新約で 29 回のうちマタイが 14 回と最も多く使っています。このことばをヘブル語に訳すと「カーシャル」(כָּשַׁל)ですが、その初出箇所がレビ記 26 章 39 節にあります。そこではひとりがつまずき倒れると、連鎖的に他の者もつまずき倒れてしまう不安定な状態になるという意味

で使われています。今回の場合、バプテスマのヨハネがイエシュアにつまずくということは、彼を知る群衆にとっても大きな影響があるとイエシュアは考えたと思います。そうならないためにも、イエシュアはバプテスマのヨハネを知る群衆たちに対して、誤解しないように語っているのが7節以降なのです。

2. ヨハネのことについて語るイエシュア

【新改訳 2017】マタイの福音書 11 章 7～11 節

7 この人たちが行ってしまうと、イエスはヨハネについて群衆に話し始められた。

「あなたがたは何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。」

8 そうでなければ、何を見に行ったのですか。柔らかな衣をまとった人ですか。

ご覧なさい。柔らかな衣を着た人なら王の宮殿にいます。

9 そうでなければ、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そうです。

わたしはあなたがたに言います。預言者よりもすぐれた者を見に行ったのです。

10 この人こそ、『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。』

彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。

11 まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした。しかし、天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です。

●ここでイエシュアは群衆に対して、「あなたがたは何を見に行ったのですか」と繰り返し尋ねています。つまり荒野で預言者の声として語っていたヨハネに焦点を当てるためです。イエシュアは質問しながら自ら答えています。群衆が荒野に行って目にしたのは、「風に揺れる葦」でもなく、「柔らかな衣をまとった人」でもないでしょう。あなたがたヨルダン川へ向かったのは、神のことばをまっすぐに語る「預言者」に会うためではないですか。それは間違っていないのです。しかもイエシュアは彼を「**預言者よりもすぐれた者**」と言って評価しています。そして10節に「**この人こそ『見よ、わたしはわたしの使いをあなたの前に遣わす。彼は、あなたの前にあなたの道を備える』と書かれているその人です。**」と述べています。「書かれているその人です」とは、バプテスマのヨハネは普通の預言者とは異なり、預言者によって預言された人物としてイエシュアの前に遣わされた者、しかもイエシュアの「前に道を備える」という前座的働きのために遣わされた預言者だということです。つまり、預言された預言者というのは珍しい存在だということ、さらにメシアなるイエシュアの道を備えるという特別な働きゆえに、彼は「**預言者よりもすぐれた者**」と言われているのです。旧約時代の預言者マラキがそんな彼の出現を預言していました。

【新改訳 2017】マラキ書 3 章 1 節

「見よ、わたしはわたしの使いを遣わす。彼は、わたしの前に道を備える。あなたがたが尋ね求めている主が、

突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる契約の使者が、見よ、**彼が来る。**——万軍の【主】は言われる。」

●マラキ書 3 章 1 節の「彼」が、4 章 5 節では「預言者エリヤ」と言い換えられています。

【新改訳 2017】マラキ書 4 章 5～6 節

5 見よ。わたしは、【主】の大いなる恐るべき日が来る前に、**預言者エリヤ**をあなたがたに遣わす。

6 **彼は**、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。

それは、わたしが来て、この地を聖絶の物として打ち滅ぼすことのないようにするためである。」

●ヨハネはまことに偉大な者でした。さらにイエシュアのことばが続きます。11節「**まことに、あなたがたに言います。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした**」と。

最大限の賛辞をしています。「女から生まれた者」という表現は、旧約で2回(ヨブ記 15:14,25:4)、新約で3回(マタイ 11:11、ルカ 7:28、ガラテヤ 4:4)使われていますが、すべて「人間」を意味するヘブル的表現です。つまり人間の中で「バプテスマのヨハネより偉大な者は現れませんでした」というのは、イエシュアのために道備えをするというヨハネに与えられた特別な使命のゆえです。「**現れませんでした**」と完了形で書かれています。過去だけでなく、現地上で生きているすべての人を含めて、イエシュアは「現れなかった」と言っているのです。これほどまでに、イエシュアはヨハネの偉大さを語っているにもかかわらず、イエシュアは次のように述べています。「**天の御国で一番小さい者でさえ、彼より偉大です**」と。

●ここが実は最も重要なところなのですが、御国の民の中でたとえ一番小さい者でさえ、彼より偉大だということ。その理由は、ヨハネが陥っている「つまずき」のゆえです。御国の民である「一番小さな者」(=イエシュアの弟子を意味します)は、天の御国を知り、それを広める使命が託されている点で、ヨハネとは比べようもないほどに「偉大」(「メガス」 μέγας)なのです。御国の中で「一番小さな者」(「ミクロス」 μικρός)のことをイエシュアはマタイ 11章 25節では「幼子」(「ネーピオス」 νήπιος)とも呼んでいます。この言葉が聖書で使われる時は文字通りの「幼子」を意味することもあります。イエシュアの弟子のことを指す言葉となっています。新約聖書では信仰者を、霊的な意味で「幼子」(「ネーピオス」 νήπιος)と「成熟した者」(「テレイオス」 τέλειος)とに分けています。

3. 「耳のある者は聞きなさい」

【新改訳 2017】マタイの福音書 11章 12~15節

12 バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています。

そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。

13 すべての預言者たちと律法が預言したのは、ヨハネの時まででした。

14 あなたがたに受け入れる思いがあるなら、この人こそ来たるべきエリヤなのです。

15 耳のある者は聞きなさい。

●ヨハネのことを知っている群衆に対して、イエシュアは 12~15節で語り続けます。ところが、12節の「**天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。**」という部分が実はとても難解なのです。どの注解書を見ても良くわからないのですが、『イエスはヘブライ語を話したか』(ミルトル社、1999年)という本の中で、ダヴィッド・ビヴィン氏がこの箇所について取り上げ

ているのでそれをご紹介したいと思います。

●ダヴィッド・ビヴィン氏は、この 12～14 節を理解するためには、フルッサル教授(ヘブライ大学名誉教授)によって発見されたイエシュア以前のラビ(ラダック)の**ミカ書 2 章 12～13 節の解釈**(ミドゥラーシュ)が鍵だとしています。今回はその解釈を取り上げてみたいと思います。と同時に、私が「牧師の書齋」のミカ書の瞑想で書いていることから説明してみたいと思います。まずはその聖書箇所を見てみましょう。

【新改訳 2017】ミカ書 2 章 12～13 節

12 ヤコブよ。わたしは、あなたを必ずみな集め、イスラエルの残りの者を必ず呼び集める。

わたしは彼らを、囲いの中の羊のように、牧場の中の群れのように、一つに集める。

こうして、人々のざわめきが起る。

13 打ち破る者は彼らの先頭に立って上って行く。彼らは門を打ち破って進み、そこを出て行く。

彼らの王が彼らの前を、【主】が彼らの先頭を進む。」

●この預言は、明らかにメシアによって確実に起る**終末の預言**です。終末預言は私たちが「御国の福音」を理解する上できわめて重要です。その箇所には同義的パラレリズムが繰り返して用いられており、将来に起る出来事の実確性が強調されています。12 節で重ねられている動詞は「アーツーフ」(אָרֹס)で、「集めに、集めて」で「**必ずみな集め**」と訳されています。もうひとつは「アーツーフ」と同義の「カーヴァツ」(קָרַב)で「呼び寄せ、呼び集める」で「**必ず呼び集める**」と訳されています。そのようにしてイスラエルの神を敬う「残りの者」たちを、囲いの中の羊のように一つの群れにするということです。そしてこのことが、ことごとく、確実に、必ずなされるという預言なのです。

●12 節には「わたしと呼ぶ主が、イスラエルの残りの民を必ず呼び集めること」が三回にわたって繰り返されています。これはメシアが地上再臨の前に実現されることです。「**囲いの中の羊のように**」「**おりの中の羊のように**」と訳された部分は、新改訳の脚注によれば、「**ボツラの羊**」とも読めるとしています。「囲い」とか「おり」と訳されたヘブル語が、エドムの「ボツラ」(בֹּצְרָא)と同じ綴りだからです。「ボツラ」は、イスラエルの「残りの者」たちが獣と呼ばれる反キリストの支配から逃れると預言されている場所です。彼らはそこにおいて「恵みと嘆願の霊」が注がれ、自分たちが十字架につけたイエシュアこそ神の御子メシアであることに目が開かれます。そのことによって、イスラエルの「残りの者」はイエシュアを王としてつき従い、一つの群れとなるのです。そのときのことをイザヤ書 63 章 1 節で以下のように預言しています。



「エドムから来るこの方はだれだろう。ボツラから深紅の衣を着て来る方(=再臨のメシア)は。その装いには威光があり、大いなる力をもって進んで来る。」「わたしは正義をもって語り、救いをもたらす大いなる者。」「【新改訳 2017】

●ミカ書に戻ります。「**こうして、人々のざわめきが起るのです**」の「**人々**」とはボツラに隠されたイス

ラエルの残りの者たちです。そしてそこにメシアが現われるとき、「人々のざわめきが起る」のです。「ざわめきが起る」と訳されたヘブル語は「フォーム」(רומ)で、「かき乱す、どよめく」と言った意味です。このイメージを先ほどのダヴィッド・ビヴィン氏は、以下のように説明しています。

「これらの句は(ミカ書 2:12~13)、比喩的なイメージに富んでいる。それは、夜間のために羊を囲いに囲んだ羊飼いの図である。羊飼いは、丘の斜面で岩を積んで仮の石垣をつくって、羊の囲いとする。翌朝、羊を連れ出すのに、並べた岩のいくつかを放り投げて、石垣に穴を開ける。羊飼いは、自分のその「門」から羊を引き連れて出る。羊たちは一晩中囲いに入れられていたので、窮屈な場所から早く飛び出たいと待ちかねている。もちろん、押し合いへし合い、中には一度に出たいとする幾匹もあり、文字通りに「打ち破ろう」と飛び出そうとする。・・・ついに広い野原に出て、羊飼いの後に突進している羊たちの姿がある。」

- このイメージを持って 13 節を、先ほどのラビの解釈にしたがって理解するとどうなるのでしょうか。

13 打ち破る者は彼らの先頭に立って上って行く。彼らは門を打ち破って進み、そこを出て行く。

彼らの王が彼らの前を、【主】が彼らの先頭を進む。

- 本来ならば、「打ち破る者」と「彼らの王」とは同義的パラレリズムよって同一人物であるべきなのですが、ラビの解釈は「打ち破る者」をエリヤと解釈し、「彼らの王」をメシアであると解釈しているのです。この解釈をフルツサル教授が発見して、イエシュアもその解釈をもってバプテスマのヨハネと自分の関係を語ったのだとしているのです。そのように解釈すれば、マタイの 11 章 12 節の「バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は激しく攻められています」の解釈はどうなるのでしょうか。

- ミカ書 2 章 13 節の「打ち破る」と訳されたヘブル語は「パーラツ」(פרץ)です。「どっと流れ出る、ほとぼしり出る」という意味のことばです。その意味でマタイの 11 章 12 節を訳すと、「バプテスマのヨハネの日から今に至るまで、天の御国は「激しく攻められています」ではなくて、「ほとぼしり出ている」、そして「激しく攻める者たちがそれを奪い取っています」ではなくて、「その中のすべての者がほとぼしり出ている」という意味なのです(新改訳 2017 は 12 節の別訳として「力強く到来しています」とあります)。

- ミカの預言の成就是キリストの地上再臨前のことなのですが、御国はすでにバプテスマのヨハネの時からそれが始まっているということをイエシュアは語っているのだということです。確かに、天の御国はそこに入る人々によって「ざわめいている」のです。天の御国は、バプテスマのヨハネの登場とイエシュアの登場によって、**すでに**始まっているのです。しかし**いまだ**その時は完全には来ていないのです。この緊張関係が同時に起こっているということをヨハネは理解できなかったのです。そして「風に揺れる葦」のようにイエシュアにつまずいたのでした。しかし今、イエシュアの話を知っている群衆に対して、このことを理解するように、信じるようにと求めたのが、「耳のある者は聞きなさい。」(15 節)ということばだったのです。このフレーズは御国の奥義を知ることにおいてきわめて重要な語彙なのです。

2018.12.9